2023 年度活動報告　（日本ユネスコ協会連盟作成）

“世界寺子屋運動”名古屋実行委員会ではアフガニスタン、カンボジア、ネパール、ミャンマーの 4 か国に支援を行っております。現地のリポートを日本ユネスコ協会連盟よりいただきましたので、ご紹介いたします！

★アフガニスタン★

1970 年代のソ連軍の侵攻やその後の内戦、タリバン政権による抑圧、アメリカ軍による空爆などの度重なる国難に見舞われ、学校などの教育システムが破壊されてきました。結果的に、世界で最も識字率の低い国の一つに位置付けられています。それを受けて世界寺子屋運動では、2002 年より、教育復興の礎となる成人識字教育を中心に、生活のための職業訓練なども合わせて実施してきました。

しかし 2021 年 8 月の政変により、女性の教育や社会進出に消極的な勢力が政権を握ったことで、教育に関する状況は大きく後退しています。2023 年度末現在、女子は小学校までの教育しか受けることができず、女性の就労は大幅に制限されています。

～活動報告～

年度当初は、教育省識字局との連携の下、寺子屋において成人向け識字教育及び職業訓練を 2 年ぶりに再開するための準備を進めていましたが、暫定政権が教育事業に対する NGO の参画を一時的に停止する措置をとったため、無期延期となりました。ただ、教育省が独自に識字教育を実施する方針との報を受け、学びの場である寺子屋を整備するため、井戸の修繕を支援しました。

一方で、コミュニティにおいては、経済状況の悪化に伴い職業訓練を要望する声が多く聞かれたため、関係機関である労働省や商工会議所等から情報収集を行いました。結果的に、貧困層を対象とした技術訓練を実施するためのパートナーを求めていた労働省より協力要請があり、2024 年 3 月に事業実施にかかる覚書を締結しました。2024 年度中に、職業訓練を実施する予定です。

2024 年度は労働省との覚書に基づき、カブール州内複数の職業訓練施設において、男性を対象とした職業訓練を実施予定です。訓練内容は、裁縫のほか、ソーラーパネルの設置及び修理、家庭内の電化製品の修理などが予定されています。

修繕された井戸の水質を確認（DC5 寺子屋）

DC5 寺子屋における井戸の修繕の様子
（掘削作業）

DC5 寺子屋における井戸の修繕状況をモニタリングする当連盟の職員ら

労働省副大臣との打ち合わせの様子（中央右が副大臣、左が当連盟アフガニスタン事務所長）

★カンボジア★

1970 年代から 90 年代にかけて内戦状態にあったカンボジアでは、教育が完全に途絶え、現在も長い復興途上にあります。成人識字率は 84%（2022 年）ですが、都市部と農村部間や男女間で格差が存在します。読み書き計算などの基礎的な学習能力は、新しい知識や技術を学ぶ土台であり、世代を問わず欠かすことができません。加えて、貧困のため義務教育段階で中途退学する子どもの多さが長年の課題です。UNESCO によると、小学校修了率は 75%、中学校修了率は 48%に留まります。更に、2020 年代はコロナ禍に見舞われ、特に貧困層は生活や学業に大きな影響を受けています。

～活動報告～

2023 年度も計画通りに活動を行うことができました。教育活動では、成人識字クラス、小・中学校クラス、幼稚園クラスなどを通じて計 920 人に学びの機会を届けることができました。とりわけ、寺子屋で新たに開始した中学校クラス（LSEP）は、2 年間の修学で中学校修了資格が得られ、高校進学が可能となるため、子どもたちの選択肢が増えるという観点から画期的な試みとなりました。

また、養牛や収入向上活動に 286 世帯が新たに参加し、必要とする知識やスキルを学びました。その他、図書館活動、各クラス教員と寺子屋運営を担う運営委員向けの研修も継続して実施しています。

一方で、事業を隣接州に拡大するという当初計画については、教育施策の地方への権限移譲に伴い、シェムリアップ州教育局が弊会の州内における活動強化を要望していることから、一旦見送ることとなりました。

22 軒目の寺子屋完成

2024 年 2 月、シェムリアップ州スバイルー郡スバイルーコミューンに新しい寺子屋ができました。州内で最も貧困率が高いスバイルー郡では、成人の 6 人に 1 人が読み書きできず、子どもの 4 人に 1 人が学校に行っていません。今後、寺子屋で小学校クラス、識字クラス、職業訓練などを行い、可能な限り多くの人々に学習の機会を届けます。

スバイルー寺子屋外観

中学校クラス（LSEP）の授業の様子

寺子屋の図書室で読書や塗り絵などを楽しむ子どもたち

識字クラスの様子

幼稚園クラスの様子

小学校クラスの様子

2024 年度は寺子屋 1 軒の建設を予定しているほか、引き続き成人識字クラス、小・中学校クラス、幼稚園クラスなどの教育活動を行うと共に、収入向上活動や、寺子屋の自立的な運営を目的とした運営委員の能力強化に努めます。一方で、2025 年 1 月を期首とする 3 か年事業計画の覚書をカンボジア政府と締結する必要があるため、2024 年度前半は、データ等の情報収集や分析を行うとともに、計画策定に向け教育省や関係者と協議を行います。

～現地学習者からのメッセージ～

トエルト・チョン・ビンさん（ワリン寺子屋　小学校クラス）

「私は、コロナ禍の時に学校をやめて、家の手伝いをし、両親の畑で働いていました。寺子屋の小学校クラスについて初めて知ったとき、自分が学習についていけるか、とても不安でした。しかし、１年目を終えた今、寺子屋にいる先生のおかげで、たくさんのことを学べたと胸を張って言えます。再び学ぶ機会をいただけていることに大変感謝しています。」

★ネパール★

北側にヒマラヤ山脈がそびえ、インフラ整備や輸送などに多くの課題を抱え、経済発展にも地域格差が見られます。近年は観光業や海外送金によって経済成長を続けており、小学校就学率は大幅に改善してきました。しかし、都市部と農村部間の教育格差は新型コロナの影響もあり拡大しています。また、農村部では、小学校入学前の就学前教育を受ける子どもの割合が都市部と比較して低い現状があります。

～活動報告～

コロナ禍の影響による中途退学児童生徒数の増加と、世帯収入の減少などによる児童婚増加のリスクを念頭に、学校に行けない子どもの多い南部ルンビニ地域で活動しています。2023 年度は 3 年間の小学校クラスが 2 年間に短縮され教科書も新しくなりました。ネパール語、英語、算数および総合科目（理科、社会、保健など）を週 6 日学んでいます。地域の建物で行われる通常のクラスだけでなく、近くの田んぼや畑で農業について学習する課外授業や女子生徒を対象とした母子保健や女性の権利に関するクラスも行いました。

さらに、小学校入学前の 4 歳児 201 人が幼稚園クラスで学んだほか、親子がお互いに読み書きと地域の祭りなどの伝統文化や料理を教え合う家庭内識字クラスには 200 人が参加。また、基礎識字と農業研修などの職業訓練を組み合わせたプログラムには、100 人が参加しました。

2024 年度は、幼稚園クラスや小学校クラス、成人識字クラスを継続して子どもや大人の学びを支援します。また、プロジェクト終了後も地域の人びとによって寺子屋が持続的に運営されるよう、寺子屋を運営する運営委員への能力開発研修を行います。さらに地方政府（市長や教育担当職員）を対象としたワークショップをルンビニで実施し、地方政府が寺子屋の役割を認識し、資金的および技術的な支援を行うことを目指しています。

幼稚園クラスでフルーツの名前をネパール語と英語で覚える

小学校クラスでは地震発生時の対応など防災も学んでいる

～現地学習者からのメッセージ～

「小学校は家から遠く、またお金がかかるので通えませんでした。でも、近くの寺子屋で実施される小学校クラスに通い始めて、ネパール語の本を読んだり、簡単な英語の文章を読んだりできるようになりました。英語の過去形や未来形もわかりますし、四則計算もできます。先生の教え方はわかりやすいです。クラスを卒業したら公立の学校に進学したいです。」

アーチャル・クルミさん（ドハニ寺子屋　小学校クラス）

★ミャンマー★

長期にわたる軍政時代の経済的停滞と、対立する複数の少数民族との和解プロセスの停滞からの政情不安に見舞われてきました。UNESCO によると、成人識字率は推定 76%であり、子どもや若者の中途退学率の高さも主な課題のひとつです。小学校最終学年就学率は 95%に達する一方、中学校では 65%に留まります。2020 年代に入り、コロナ禍の影響に加え、2021 年 2 月の軍事クーデター以降は現地での活動が難しい状況が続いています。

～活動報告～

ミャンマー国内での活動実施が困難なため、2024 年 2 月からバングラデシュにおけるミャンマー難民への支援を行っています。2017 年のミャンマー西部ラカイン州での国軍による大規模軍事介入により、70 万以上のロヒンギャの人びとがバングラデシュに逃れ、難民キャンプでの生活を余儀なくされています。

「世界寺子屋運動」では、UNESCO ダッカ事務所を通じて、ミャンマー難民の青年を対象にビルマ語と英語の読み書きを教える取り組みを行っています。さらに、移動式床屋や手工芸品づくり、刺繍などの技術訓練も実施しています。 加えて、難民キャンプ周辺に住むバングラデシュの青年にも手工芸品づくりなどの技術訓練を提供し、難民キャンプを含めて 300 人が学習しました。これらの取り組みにより、難民や地域住民が識字能力や技術を身につけ、現在の難民キャンプやミャンマーに帰還した際に活用していくことが期待されています。

2024 年度はミャンマー国内での活動可能性について情報収集を続けるほか、バングラデシュについては 2023 年度事業の成果を評価し、活動継続について検討していきます。

キャンプ内の識字クラスの様子（英語の曜日を学ぶ）

移動式床屋のトレーニング

～現地パートナーからのコメント～

ミャンマーからバングラデシュに逃れてきたロヒンギャ難民への国際的な支援は減り続けています。これはロシアによるウクライナ侵攻やガザの人道危機など、新たな脅威に関心が集まっているからです。皆様からの支援に感謝申し上げますとともに、引き続きのご支援をお願いいたします。